

その6 えっ！ムラシャカイ？

油井 文江

株式会社ゆいアソシエイツ代表 中小企業診断士

社会人セミナーで資格の話をする事になり、市販の資格本数冊をみました。「中小企業診断士」の項もチェックすると、飛び込んできたのは「村社会」の3文字。市場でよく売られている資格本での診断士の紹介コピーは、「独立して仕事を得るには『村社会』での修行が必要」でした。身内の恥をみたような恥ずかしい気持ちと、認識を変えてもらうにはどうしたら？の思いがめぐりました。

当シリーズのテーマは「品格」。自尊と他尊を本質とする品格に前近代的な「ムラシャカイ」はなじみません。なぜこういわれるのか、どう考えたらよいかを取り上げてみます。

1. 前近代性の象徴「村社会」

(1) 「ホンネと現実」版のリアリティー

ショック効果を与えてくれた書籍は「資格図鑑2008 これが人気資格のホンネと現実」、オバタカズユキさんの著です。資格の実際を活写し、370ページを一気に読ませます。診断士と身近な存在である税理士、弁理士、社労士、司法書士なども取り上げられていました。

紹介される「ホンネと現実」は多様で、「バブリーなブランド学位」(MBA)、「悪名高き天下り制度」(税理士)、「中高年層は概して閉鎖的で排他的」(司法書士)、「『マジ層』でも少なからずが食えずに退散」(行政書士)、「コンサルで生き残りたいなら資格に頼るな」(社労士)など、軒並みリアルな辛口です。それでも「村社会」に匹敵する前近代

性を示す形容詞は他のどの資格にも見当たりませんでした。

(2) 「村社会」とは

「村社会」とは、封建的であって、現代的でないことです。「局所的で内向的なコミュニティ」ともいわれ、大まかにまとめると以下の特質を持ちます。

構成員の特徴

- ・お上の下に自分たちという古い意識
- ・自己主張をせず、所属する組織の価値観や決定に従う
- ・異質を排除しようとする
- ・議論を嫌い陰口を好む
- ・横並び志向を有する

構造的特徴

- ・親分・子分のヒエラルキー
- ・排他主義と仲間意識により、異論者や他者を排斥(村八分)する
- ・「優れたもの」「目立つ者」に対する妬み・ひがみなどの劣情が構造化

「村社会」は個人が未確立の古い意識世界。外部の第三者に映る姿がこうだとしたら、謙虚に受け止めるのがよいでしょう。内なる意識と行動を自戒する振り返りは常に有益です。特に慣れによる麻痺、「自分もそうされたから」の後継者への付回しなどは「村社会」を再生産し、悪影響が大きいものです。それは素晴らしい活動をする多くの診断士をおとしめてしまいます。

(3) 個人の「自由」を欠いた前近代

近代の中心思想は「自由」です。かのルソー、カント、ヘーゲルの思想のキーワードは「契約」と「自由」。彼らにとって「近代」は、中世の呪縛から離れた「自由」の理念を実現する時代でした。この近代を経て個人の「自由」を社会的・制度的に実現したのが「現代」です。ちなみにヨーロッパでは、1914年の第一次世界大戦の勃発前後が、近代と現代の境目です。

日本の「近代」は、明治維新以降から1945年の終戦までとされ、村社会は閉じた統治単位として、幾度もの戦争を支える存在でした。日本は近代といってもわずか80年弱の期間でしたから、特に近代的理念の浸透が不十分のまま「現代」に移行しています。その分、今でも日本は意識面の前近代性が残る社会といわれ、その象徴として「村社会」や「村八分」の文化が語られます。

現代経営のコンサルティングをしようという人間にとって、「村社会」イメージを喜ばずもなく、年齢が若いほど、センシティブで有能な人材ほど、これを忌避することでしょう。また、前近代性をまとう組織に品格はありえないことも彼・彼女らは知っているはずです。

2. 組織の体質を正す存在

(1) 「No といえる」組織と個人

昨年を象徴する文字は「偽」でした。挙げた人は情けない社会との思いをこらえてのことでしょう。ただ、そうした人でも企業内では組織大事で違法行為を黙視する、また異議申し立てへの制裁を恐れて加担に追い込まれる、そうした古い実態は隠然として存在します。

ブランド米の産地偽装をした米卸会社「日本ライス」の社長は、古米やくず米の混入指示に反対した工場長に「明日から入社しないでいい」といったそうです。会社ぐるみでブランド米偽装を続けたこの会社には、暗く抑圧的な「村社会」の特徴が満載でした。市場



イラスト：すずき 匠

経済はグローバル化とともに競争ルールの整備を進めています。基盤は問題や不正に対して端然と対峙できる個人と組織です。それはいってみれば「No といえる」組織と個人による社会関係の実現でもあります。この点、大企業が社会的制裁をバネとして組織変革を進めるのに対し、中小・零細企業は一般的に遅れています。コンサルタントは社長と企業の古い体質を鋭敏に感知し、改善支援する立場。その診断士へのはかばかしくない認識は、一刻も早く「消去」したいですね。

(2) 大事な時代対応への努力

日本では、「コンプライアンス経営実現の最大のバリアはトップマネジメント」といわれます。経営中枢はコンプライアンスのコントロール・キーであると同時に、チェックの最重要対象です。そうであればこそ、課題は下部のみに負えることではないのです。

社会は、組織の時代対応への努力を知るとき、組織を支持し、クライシスがあったとしても見はなしません。どのような組織であれ、リーダー層が先に立って自らの組織体質を正し、時代に沿わせる努力をすることが利益を生む礎だと確認したいものです。

皆様のご意見、ご感想をお寄せください。

油井 文江

(ゆい ふみえ)

横浜国立大学卒業。企業広報に携わった後2003年に独立。流通・サービス業のコンサルティング、創業、CS等の研修・執筆に従事。経済産業省政策審議委員等。

